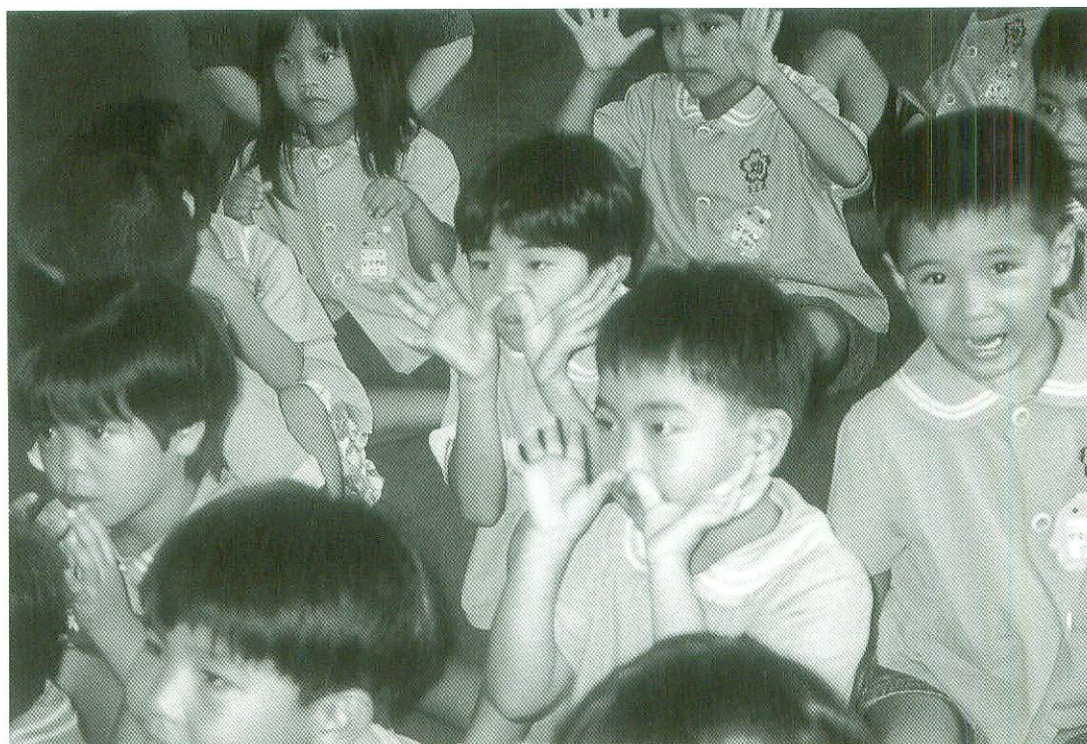


東 風

第二号

7年(1995) 9月



南部広域行政組合
島尻教育研究所

目 次

○ 随 想	否定と肯定	所 長 宮 城 恒 彦 …………… 1
○ 修了者及び後期入所予定者、指導講師一覧		…………… 2
○ 教育雑感		島尻教育研究所運営委員長 …………… 3 新 垣 博
○ 学級活動の活性化の一手だて	指導講師 豊見城村教育委員会指導主事 …………… 4	高 良 清 吉
○ 研修を終えて		島尻教育研究所 研究員 …………… 7
○ 教育講演（要旨）		お 茶 の 水 女 子 大 学 …………… 14 教 授 森 隆 夫
○ 研究の中から	島尻地域の統合保育の実態（アンケートの結果） …………… 19	糸満市立糸満南幼稚園教諭 佐久間 美佐子

否定と肯定

所長 宮 城 恒 彦

先日、人間ドックに入った。受検者が、みんな健康そうに見える。異常があるのは自分ひとりではないかという不安がよぎる。しかし、どの顔を見ても緊張しているようである。検査技師や看護婦のちょっとした不審な動作や言葉遣いにも、こちらは神経を使う。眼底写真のとりなおしをした。悪い症状があらわれているのかなと疑ったりする。他人より時間が、かかったような胃のX線撮影や肝・腎臓の超音波検査に「もしかしたら……」と思ったりもする。体重を量った。平常より5 kgも少ない。減量に成功したのかと嬉しくなったが、待てよ、何かの病気で、やせてきたのではないかと、また、動揺する。計器への入力ミスで5 kg減らしていたことが後でわかり、がっかりするやら、安心するやら。

すべての検査が終り、いよいよ医師の総合判定が始まる。診察室へ入っていくときの様子と、出てきた時との受検者の顔を見れば、診断の結果が推察できるものである。医師の前に腰掛ける。何かの宣告を待つ心境だ。レントゲン写真や諸検査票の数字等も見つめている医師の顔が、神になるか閻魔になるか、最初に出てくる医師の言葉で決まる。

ある病院で自分の診察の順番を待っていた。カーテン越しに隣の医師が患者に話しをしているのが、もれてくる。患者の耳が遠いのか、医師の声も大きい。「おじいさん、この薬をきちんと飲まないと、病気は治りませんよ、」おじいさんは「はい」をくり返している。「この薬をきちんと飲むと、病気は治りますよ、」と、どうして肯定的な表現で諭さないだろうか。病院を訪ねる人は皆、自分の健康に自信を持っていない。医者に否定的な言い方をされると、絶望的な気持ちに落ち込んでしまうものである。

人間は同じ内容の事であっても、否定的な表現と肯定する言い方とでは、聞く人の気持ちの上で大きな差が出てくる。教師が子ども達への言葉遣いも医者と同じであろう。大学の頃、図工科教材研究の受講で石膏の人物彫塑をデッサンしていた。机間巡視で一人一人に指導助言をしていた美術学科の教授が、私の机の側で立ち止まって、しばらく画面を見ていたが、「きみのは車にひかれたカエルのようなだね」と一言いい残して立ち去った。それ以来、絵筆をにぎったことはない。

中学校の進路指導で、教師がよく使う言葉で「もっと努力しないと、希望する高校には合格しません」「もう少し数学に力を入れないと、何番以内の席次には届きませんよ」というのがある。親や生徒の立場からすると、これらの助言は、どのように響くのであろうか。

生涯学習の一環として、地区ごとに長寿学園が開設されている。60年以上の人生のキャリアを積んだ人達が受講している。指導には、その道に豊かな経験を経てきた練達の講師があたっている。指導助言が実に巧い。絵画の先生は、受講生の作品の中から必ず一か所でも長所を見つけ出してほめる。「この色はよく出ています。」「この枝の描き方は生き生きとしています。」というふうに。私の目には、原色ばかりで、描き方も幼稚に映るのに。ほめられた熟年の方も、にこにこして童顔に戻る。舞踊の先生は、基礎・基本は厳しくチェックしながらも、一か所は必ずほめている。

人を伸ばすとは、どういうことか。講座の先生方はその神髄を教えてくれている。「医は仁術」という。医者の一言が患者にどんな影響を与えるか、「病は気から」という言葉もある。教師が「愛語」をもって、子供を肯定すれば、否定的な言い方よりは、はるかに指導の効果はあがるものと信じる。さらに、「和顔」をも付け加えて接すれば、効用は倍加するであろう。

平成7年度 前期 教育研究修了者及びテーマ一覧

島尻教育研究所

期数	勤務校	氏名	研究領域	研究テーマ(予定)
前期	1 豊見城村立 上田幼稚園	富田 佐代子	表現	幼児一人一人の表現力を育てる援助の工夫 －絵本とのかかわりを通して－
	2 糸満市立 糸満南幼稚園	佐久間 美佐子	統合保育	幼稚園における望ましい統合保育のあり方 －教師と障害児、健常児、三者のかかわりあいを通して－
	3 糸満市立 光洋小学校	賀数 五十美	国語科	筋道を立てて話す子を育てる指導の研究 －児童の「話すこと」(内容、順序性、音声、態度)についての考察－
	4 与那原町立 与那原小学校	照屋 考代	学級経営	自ら考え、進んで活動しようと意欲を育てる学級経営 －一人一人のよさを生かす係活動の工夫を通して－
	5 大里村立 大里南小学校	川崎 佳子	国語科	一人一人が意欲的に取り組む作文指導 －意見文の指導を通して－
	6 南風原町立 北丘小学校	小波津 久美子	教育相談	いじめに関する基礎的研究と指導の一視点 －個をとりまく学級集団の指導を通して－
	7 具志頭村立 具志頭中学校	山田 宏	教育相談	生徒の心に迫る教育相談 －自己教育力を高めるかかわり－

平成7年度 後期 指導講師及び担当教科

指導講師	指導教科等	所属名
儀間 朝善	国語	知念小学校 校長
酒屋 祐定	道徳	兼城小学校 校長
金城 忠明	算数	長嶺中学校 教頭
安次嶺 敏雄	教育相談(生徒指導)	真壁小学校 教頭
高良 清吉	学級経営	豊見城村教育委員会 指導主事
名嘉元 美佐子	幼稚園教育	豊見城幼稚園 教頭
名嘉 峯子	幼稚園教育	与那原幼稚園 教頭

平成7年度 後期 入所予定者及びテーマ一覧

期数	勤務校	氏名	研究領域	研究テーマ(予定)
後期	1 糸満市立 米須幼稚園	又吉 ノリ子	幼稚園教育	幼児の思いに添って幼児と共に創る保育 －真に求められる教師の援助のあり方を求めて－
	2 豊見城村立 豊見城幼稚園	與那嶺 多喜子	幼稚園教育	幼児が聞く、話す、楽しさや喜びを味わうようになる には、環境をどのように構成すればよいか。
	3 豊見城村立 伊良波小学校	平田 清美	国語科	新しい学力観に立つ国語科授業の創造について －個に応じた指導のために－
	4 糸満市立 兼城小学校	亀川 盛敏	算数科	自ら学ぶ意欲を育てる学習指導の工夫 －算数の問題解決学習を通して－
	5 糸満市立 糸満小学校	新城 栄子	道徳	道徳的実践力を育てるための授業の工夫 －体験学習と授業実践を通して－
	6 糸満市立 真壁小学校	仲村 克美	学級経営	楽しく潤いのある学級づくりを目指して －音楽、歌声、身体表現で深める人間関係づくりを中心に－
	7 玉城村立 玉城中学校	井上 律子	特別活動	カウンセリングマインドを生かした学級経営

教 育 雑 感

島尻教育研究所運営委員長 新 垣 博

◇ 島尻教育研究所の設立を喜ぶ

教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならないとされている。この度、教育に関する調査・研究・研修を行うなどの目的で、島尻教育研究所が設立されたことは島尻教育振興のため喜びにたえない。所期の目的が達成されるよう期待する。

◇ 「これならできる」教育

子どもが鉄棒の「逆上がり」が出来た場合を例にとる。その場合教師が子どもに対して「君はこれなら出来る」という言葉を「君はこれしか出来ない」という言葉をかけるということでは、両者の子どもに与える影響は全く異なるのである。「君はこれなら出来るだろう」という励ましになるような言葉づかいの配慮をしたいものである。

かつて、教員の地位がそれ程評価されなかった頃「でも、しか先生」という言葉が使われたことがある。そのようなこともあって、昭和49年に「学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法」が立法され、一般の公務員の給与水準に比較して優遇措置が講じられたのである。

◇ 教育を考えるための古典のすすめ

教師は、毎日の教材研究等に直接関係のある図書にはよく目を通すが、教育の古典といわれる図書には接する機会は少ないのでないかと思う。そこで私の本棚の中からいくつかを紹介したい。

『蘭学事始』 江戸時代の蘭法医で、日本医学の先駆者といわれる杉田玄白の著。実証精神と探究精神を説いている。

『和俗童子訓』 江戸時代の儒学者である貝原益軒の著。教育はできるだけ早い時期から始めるべきだと主張している。

『省儉録』 幕末の蘭学者で蘭学の研究普及につとめ門下生を育成した佐久間象山の著。なによりもあやまちを正しながら自らを成長させていくことの重要性を教えている。

『学問のすゝめ』 幕末から明治の中期にかけて、日本の第一級の知的指導者といわれ、一万円札にある人物福沢諭吉の著。

『方法序説』 フランス近世哲学の生みの親、解析幾何学の創始者であるR. デカルトの著。「われ考う、ゆえにわれあり」という言葉は有名である。

『エミール』 フランスの思想家・小説家のJ・Jルソーの著。これまでの教育が権威主義的・詰込み主義的であったのに反対して、子どもの発達段階を考え、子どもをできるだけ自然にのびのび育てることを提案している。他にも教育の古典といわれる本は多いので、一読されることをおすすめしたい。

終りに、当教育研究所が質・量ともに充実・発展されることを祈念します。

学級活動の活性化の一手だて

豊見城村教育委員会

指導主事 高 良 清 吉

1 学級活動を活発化させるための指導

学級活動の充実を図り、生徒の自発的・自治的な活動を活発化させていく手だとして、学級編成後の意図的、計画的な学級経営の方針のもとに、教師の指導を充分に行うことが大切である。

そのためには、編成後行なわれる学級活動の基本的な方針と内容について、共通理解を深める。さらに、学級や学校の実態、学年の発達段階、男女差、活動の経験の程度などを重視し、それぞれの活動内容や方法を生徒の実態に即して指導する。これらの指導を充実することにより、その活動のねらいが明確化され、意識化、共通化されて、特別活動本来の「なすことによって学ぶ」という、望ましい自発的・自治的な活動が活発になされるものとする。

学級は、学校におけるあらゆる教育活動の中心的な場である。学級生活に関する諸問題を適切に解決し、全員が協力し合い、学級の仕事を分担して処理する。活動を通して、所属感や連帯感を培い、しかも望ましい人間関係に基づいて学級生活が送れるならば、その学級における様々な教育活動の成果は、いっそう顕著になると考える。このようなことから、学級活動の充実のために、指導計画の改善や指導の工夫が求められる。

しかし、各学級の実態は、学級ごとにそれぞれ異なり、常に変化している。いわば生きた存在である。それだけに、学級活動の指導を進めて行くためには、学級活動の特質を十分理解し、学級の実態をよく把握することが必要である。

2 学級活動の指導方針

- (1) 学級生活に関する諸問題の解決、学級内の仕事分担、処理などの日常の活動を通して、よい学級を築かせる。
 - ① 自律的、自主的な態度と自治的な能力とを育成する。
 - ② 所属感、連帯感、成就感などの深化を図る。
 - ③ 協調性と責任感の伸長を目指す。
- (2) 教師と生徒、生徒相互の温かい心の触れ合いを基盤にして、発達段階にふさわしい建設的な話し合い活動ができるようにする。
- (3) 生徒が自ら適切な学級の組織を作り、それぞれの役割を自覚して積極的に活動できるようにする。
 - ① 学級活動委員会を通して、学級会の活動の計画を生徒自ら立てさせる。
 - ② 係活動や当番活動については、各学級の実態を十分に考慮し、画一化しないようにする。
 - ③ 朝の会や帰りの会等は事前に各曜日ごとに綿密な計画に基づき実践を行い、教師と生徒相互の人間関係を深める。
- (4) 学級担任は、学校の指導方針に基づきながら、学級の実態に即した計画をそのつと立て、指導にあたる。

3 学級活動の指導概念

(1) 活動の基盤づくり

中学校では、学年が進むにつれて、学級活動委員、係活動、班活動、各種委員、その他の係から責任のがれをしようとする傾向がみられる。こういう姿勢の原因として考えられることは、部活動に熱中している、学習塾、早く家へ帰りたい、係活動が面倒である等、生徒の利己的な複雑な一面を持っている。また、それ以上に入学後、身につけた集団活動での体験のあり方、人間としての生き方等が大きく影響しているように考えられる。

学年初めの学級びらき、役員選出や組織づくり、学級活動委員会の持ち方、朝の会、帰りの会、当番活動、係り活動等の持ち方については時間をかけ、熱心に活動する意欲を示す。しかし、時が立つにつれ、次第に継続性のない学級、役員や係りになっても、その仕事に責任を持たなかったり、除々に活動が停滯していくことがある。

学級初めの集団活動の体験は、今後の集団活動への意欲を高めたり、低下させたりする。新学期4月、5月の活動は、その後の一年間の活動への関わり方を決めるといっても過言ではない。そのためには、教師と生徒がさまざまな問題に積極的に関わりながら、楽しく規律正しい、明るい学校生活を築かせていくために、次のステップを踏まえ、地道に実践していくことが望ましいと考える。

① ステップ I＜人間関係を深める＞ 4月～5月

係活動を通して、教師、生徒相互の人間関係を深める時期で生徒が主体的に活躍する場を設定する。さらに集団活動を通して、人間としての生き方、存在感、成就感を培わせることにより、学級での人間関係や信頼関係が育成される。

学級活動委員の意識の高揚、朝の会、帰りの会等の進め方、朝自習の取り組み、当番活動や係活動の意義と性格、授業の受け方、家庭学習の意義等すべての基礎的、基本的事項と価値観について十分指導する。その際、教師が積極的な指導援助と実際の場で直接指導を行い、体得させる。

これらの活動を主体的に取り組み、生徒に十分理解を深め実践意欲を高揚させることにより、これからの学級活動への意欲が培われる。

4月、5月の時期は、学級経営の充実を図り、学級活動の実践を通して、人間関係の信頼を深めて行く時期とする。

② ステップ II ＜互いに深め合い、伸ばし合う＞ 6月～7月

学級も次第に落ちつき、学級の人間関係も深まってくる時期である。この機会に学習への意欲を盛り上げるために、グループ学習、個別指導、助け合い学習、補習、進級テスト等、学級の実態を把握する。特に学習の遅れがちな生徒への配慮教育相談日を効果的に活用し、学習意欲の高揚を図る。

③ ステップ III ＜個性を発揮し、高め合う＞ 9月～12月

二学期の諸行事等を通して、個性を発揮させ、自主性、創造性を高めるとともに、責任感、協力を培わせる。

生徒会活動の活性化を図り、常に望ましい組織の下で、自発的、自治的な活動が展開できるよう援助する。また、学級との連携を密に活動を積極的に取り組ませる。

陸上競技大会、体育祭、修学旅行、合唱祭、文化祭、奉仕活動等、多くの行事を通して、学級の一人一人が協力し合い、認め合い、自分の個性を発揮させる。行事を成功させることにより、学級への所属感、成就感、連帯感が深まってくる。

④ ステップ V <学級の高まりを確め、反省と評価を行う> 1月～3月

すべての生徒が積極的に活動に参加できるようにするためには、活動の意欲を高めることが必要である。そのためには、生徒の創意工夫を生かし、活動の喜びや充実感、満足感を味わせることが大切である。

一年間の活動の反省と評価を適格に実施する。これまでの活動を通した具体項目を上げ、学級全体、個人評価、個人面談等、実施し学級のよさを認め、高まりを確認し合うことは大切である。

教師は、これまでのステップを踏まえつつ、生徒の欲求、学級の雰囲気、小集団の状態などの確に実情を把握して、集団での活動ができる場と機会を設定してあげる。活動の中で意欲のある生徒を発見し、他の生徒にどう働きかけさせて全体を高めていくかということなどに配慮が必要である。

その場に応じた適切な指導援助を行い、学級活動の活発化を図っていくことが大切である。





研 修 を 終 え て

豊見城村立上田幼稚園教諭 富 田 佐代子

「光陰矢の如し」の言葉のように月日のたつのは早く4月3日の入所式から「あっ」という間の研修期間であった。入所当時は不安と期待の入り交じった気持ちであったが宮城恒彦所長をはじめ、野原廣子・上原幸得両指導主事、他の所員の温かい心づかいに支えられて、研修をすることができ、有意義な半年間であった。

研究所では、多くの文献や資料を読み「本当の保育とは？」と改めて自分に問い返す良い機会となった。また、今研修を終わるにあたり幼児教育の大切さと教師の責任の重要性を痛切に感じている。「幼児一人一人の豊かな表現力を育てるための援助の工夫」をテーマに研究をすすめてきが、今後も幼児に絵本との出会いを多く持たせ、幼児の豊かなイメージと表現力が育つように援助していきたい。

研究所では現場にない貴重な経験を多くすることができた。毎週月曜日は宮城恒彦所長、野原廣子・上原幸得両指導主事より教育問題の講話を聞き多くの事を学んだ。水曜日は『いま家族に大切な60の話』の本を通して討論をし、いろいろな考えが聞け、視野が広がった。金曜日は3分間スピーチで他の研究員の先生方の話に深く感銘をうけた。また、所内研・所外研では指導講師の先生方や玉寄長市課長、多くの先生方の話を聞く事が出来、いろいろ学んだ。また、クラブの時間に日舞「首里城」を習い、照屋考代先生の結婚式と阪神大震災義援金チャリティーの舞台発表まで持っていけたのは私にとって良い経験であった。

研究を進めるにあたり戸惑いも多くあったが、いつも暖かい言葉かけや適切なお助言をいただいた宮城所長・野原指導主事・上原指導主事、指導講師の潮平幼稚園上原須美子教頭のご指導に深い感謝の念で一杯である。また、研究員の仲間の先生方の真心あふれる励ましや暖かい言葉かけに支えられて、レポートをまとめる事が出来、心より厚くお礼を申しあげたい。特に宮城所長の手作りの『小冊子』や『色紙』『落款』をいただき非常に感激した。

パソコンのスイッチの入れ方さえもわからない私に、使い方を丁寧に教えていただき、おかげで少しパソコンに慣れてきた事は私にとって大きな収穫であった。このように先生方と出会え人の心の暖かさに触れることができ、毎日感動の連続であった。そして、自分の人生や物の見方が変わってきた。研究所で多くの皆様方と出会えたことは私の人生の大きな宝として、いつまでも残しておきたいと思っている。

また、所長からいただいた色紙「三人行けば必ず我が師有り」の言葉の意味を実感することができた。そして、物事を始める際、「継続は力なり」の言葉のように、目標を定めて継続していく事の大切さをも知った。

この機会を与えて下さった豊見城村教育委員会・南部振興会・上田幼稚園・関係各位の皆様方に厚くお礼を申しあげたる。



「出会いに感佩。／」

糸満市立糸満南幼稚園教諭 佐久間 美佐子

島尻教育研究所開所のニュースは私にとって、胸の高鳴るほどのビッグニュースだった。

そして、入所初日、宮城恒彦所長から「三人行けば、必ず我が師有り」の直筆の色紙を頂いた。その日から涙腺の弱い私は何度感激して泣いたことか。……（全く幼稚園生並みで困ったものである。反省。／）

研究所での宮城恒彦所長をはじめ、野原廣子主事や上原幸得主事との出会い。名嘉元美佐子指導講師をはじめ、6名の指導講師との出会いは教員としての責任や使命を教示してもらった。また、6名の研究員との仲間としての出会いは友として情熱を与えてくれた。

（山田宏さん）

- ・身体の大きさに負けず劣らず、心も優しく大らかで、素直な「はい」「有り難うございました」の声も大きかった。さすが5児のお父さん。初対面の時の「白髪を染めたら」の言葉を撤回したい。

（富田佐代子さん）

- ・いつもにこやかにかみしめるように話をする富田先生。人間性豊かな証拠。ご主人や義父母を大事にし、子どもを愛する心が自然と現れているのだと思う。指一本でパソコンを使いこなしたバイタリティには大感心。成せばなる何事も。／

（賀数五十美さん）

- ・ミーティングの時の話題のまとめ方、話し方、さすが「話し方」の研究者と感心の毎日であった。「天に響めさんしん3000」でのフィーバーぶりは、やはりクラブ長としての最適任者であった。今度は貴方の為にコスモス山田として、披露宴に出演したい。後勝いがふう。／

（照屋考代さん）

- ・色々なことに通の考代さん。分からない事があると解決してくれそうで、つつい尋ねてしまった。（特に英語と首里城は……）。貴方の幸せのお裾分けで私たちも研究の合間に和やかな気持ちで楽しく過ごさせてもらった。もっとお幸せに。／

（川崎佳子さん）

- ・植物を愛でる心を伝えてくれた。コツコツと常に前向きに研究に取り組んでいる姿が印象的だった。真摯な態度と生き方を見習いたい。いつもお花をありがとう。／

（小波津久美子さん）

- ・「人生とは」「人間とは」貴方が何気なく話すことに色々な疑問を見つけ、考えたり、思ったりした。教職も突き詰めればその人自身の人間性なんだと感ずることができた。子育て奮闘中、頑張ってお母さん。／（忙しいことを自分の喜びとしよう）

玉寄長市課長や大城進榮先生、南部振興会の方々との出会いは社会人としての自覚とマナーを学ぶ機会でもあった。

幼稚園という「井の中」で過ごしてきた20余年、やっと自分の小ささにも気づき、周りも見渡せるようになれそうだ。この研究の機会を与えてくれた諸々の方々に感謝したい。出会いに感佩。／



チ ャ レ ン ジ

糸満市立光洋小学校教諭 賀 数 五十美

「やってみよう」という気持ちが育つ場、それが島尻教育研究所である。

教職に携わって8年、現場では仕事をこなしていくだけで精一杯であり、毎日が気忙しく、追い立てられるような日々の中で過ごしてきた。そんな中で一人の児童と出会った。その児童が発言すると、教室中が静かになり、皆がその児童の発言に集中する。明瞭な発声、よく通る声、筋道を立てた話し振り。一般的に話すことが不得手であるとされている沖縄の子の中で、その児童の存在は私の心をとらえた。

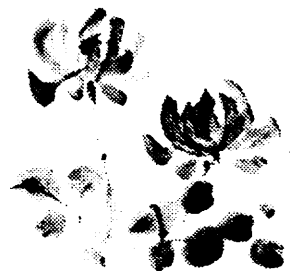
「このような子を育てたい！」

音声言語の研究は、私にとって全く初めての経験であり、まさに「チャレンジ」であった。音声言語とは何か、まずは理論からのスタートである。先行論文もそれほど多くはなく、手探りの研究であった。途中何度も、研究テーマを変えようかと悩みもした。しかし、拙い論文ではあるが、何とか当初の目標を貫くことができた。それも、この島尻教育研究所「やってみよう」という気持ちにさせられる雰囲気のお陰だと思う。

広く深い度量で私たちを見守ってくださる宮城恒彦所長であった。所長講話の度にやる気が起こってきた。そして、研究に行き詰まると親身になって一緒に考えてくださった指導主事の野原廣子先生、上原幸得先生、研究の方向性をご指導くださった指導講師の儀間朝善先生、先生方の励ましに何度も救われた。また、物心両面で私たちを支えてくださった玉寄長市課長をはじめとする振興会の職員、温かい心遣いが私たちの心を和ませてくれた。更に、喜びも苦しみも共に分かち合ってきた研究員の皆さん、自己嫌悪に陥った時でも、研究員のプラス志向が私を引き上げてくれた。何と恵まれた環境であっただろう。このような素晴らしい方々に支えられていたからこそ、私は研究に専念することができたのだと思う。

所外での活動にもいろいろチャレンジした。毎週のクラブ活動では、日舞の稽古に励んだ。思いがけず阪神大震災チャリティーショウ出演の機会を与えられ、大舞台を経験することができた。また、戦後50年の節目のイベント「天に響めさんしん3000」にも参加した。研究所で初めて手にした三線であったが、そのイベントを目標に練習を重ね実現したのである。沖縄文化のよさを再認識し、ウチナーンチュであることを誇りに思う出来事であった。それらの経験も今では私の大切な宝である。

チャレンジの連続であり、充実した半年間であった。このような研修の機会を与えてくださった與儀芳彦校長をはじめ光洋小学校の職員、また、支えてくださった全ての方々に感謝の気持ちで一杯である。





研 修 の 終 わ り に

与那原町立与那原小学校教諭 照 屋 考 代

「環境が人をつくる」この言葉がぴったりの研究所に来て、6カ月が過ぎた。入所時、所長のあいさつの中で「この研修でさびを落としていって下さい。」と受け入れられた私たちであったが、さびはどれくらい落ちたのだろうか。教職経験の浅い私にとっては、吸収することばかりの日々だったように思う。

雑談の中でも、子ども達のことを語るときは常に親の話になり、自然と夫婦の話へと広がった。結婚を控えていた私にとっては、教訓であり心の糧になる語らいだった。人生の節目にこの研究所で学ぶチャンスを与えて下さった方々に対して、感謝の気持ちにたえない。

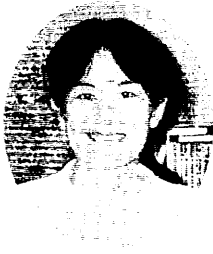
研究室での私の席は、窓に向かっていて。その両隣には、同年代の2人が並んでおり、考えに詰まったおりには意見を求め、また、求められたりと、学生に戻ったような気分で楽しく過ごした。気がついてみると、私たちの会話が止んだときの研究室は、針の落ちる音が聞こえるほどの静けさを漂わせることもあった。

沖縄クリスチャンスクールでの研修を初めとする内容豊かな所外研修（那覇市伝統工芸館、ひめゆりの塔映画鑑賞、具志頭村ハーリー見学、やちむんの里見学等）を通して、沖縄に住みながら改めて沖縄の自然風土、精神文化を見直すことができた。日頃、何気なく見過ごしてしまいそうな事に対しても、それぞれの思いを語り合うことでふさと再発見ができた。それに加えて、クラブの時間に練習した「首里城」の踊りは、乙女椿のチャリティーショーにまで出演でき、私たち二期生にとっては忘れられない思い出になった。そして、もう一つ、昼休みの一時を利用して幸得先生を中心に所員が奏でる三線の音は、午前中の疲れを吹き飛ばしてくれた。

この楽しい日々の中で、いざ報告書を書き上げる段階になると、文章をまとめる生みの苦しさも味わった。日頃は、子ども達の前で文章の書き方を教え育てている立場から逆転して、自分が書くとなると、貧弱な文章に情けなさを感じた。それと同時に、教師に尻をたたかれ一生懸命作文する子ども達の心が、手に取るように感じられる時が流れた。最新のパソコンを使い、一つ一つ文字を拾い、文を繋げていった。

そのつたない文を丁寧に読み直して示唆を与えて下さった宮城所長をはじめ、親身になって世話して下さいった野原廣子、上原幸得両主事、会う度ごとに疲れを吹き飛ばす笑いと、次への勇気を与えて下さった豊見城村教育委員会指導主事の高良清吉先生、調査研究に協力していただいた与那原小学校職員、その他諸々の方々に厚くお礼申し上げたい。現場に戻るにあたって、これまでの私ではなく、一歩前進した新たな気持ちでこれからの教育活動を続けていきたい。





出 会 い

大里村立大里南小学校教諭 川 崎 佳 子

野鳥のさえずり、咲きほこる花々、そして新緑を這う虫たち、すべての生き物が明るい日ざしに躍動する4月。私もまた、変化のある新年度に向けて、少々の不安と、それ以上に大きな希望を胸に入所式の日を迎えた。

研究室は狭いながらも、至れり尽せりの準備がしてあってとても感激したことを思い出す。所長の「入所前と比べて、自分の物の見方、考え方が変わったと思えるよう、自己変容をして欲しい」という趣旨のお言葉を胸に刻み込んだ日でもあった。

研究生生活を終えるに当たり、6カ月間の研究生生活をふり返ると一番の収穫は何といっても“出会い”であった。もちろん、研究テーマの研究も大事な収穫であるが、やはり、私は“出会い”をあげたい。宮城恒彦所長、野原廣子主事、上原幸得主事）との出会いがあったからこそ研究生生活ができたのである。（宮城所長、野原主事、上原主事）には6カ月間、言葉ではいいつくせないほどの心のこもったご指導をいただき、その度に敬服の至りであった。このようにして私たち弱年の後輩を育てていらっしゃるお姿を拝し、胸に迫るものを感じる毎日だった。また、担当の上原弘子先生との出会いによって、私の拙ない研究を弘子先生の豊かな経験からアドバイスやきめ細かいご指導をしていただき本当に感謝の念でいっぱいである。視野の狭い私のものの見方、考え方も少しは違ってきたように思う。

研究以外にも多くのプロフェッショナルな先生方との出会いがあった。講話の先生方、琉舞の仲宗根先生、歌碑めぐりの垣花武信先生方から多くのことを学んだ。お一人お一人の人生体験談、生き方、考え方が学べたことは、感激の極みである。今後の私の宝としたい。そして、私も少しでも先生方に近づけるよう努力していきたい。

もう一つは、本との出会いである。現場では、ゆっくり読めなかった専門書をじっくり読むことができた。欲を言うなら自分の研究以外の本ももっと読みたかったというのが本音である。

最後に諸活動を通しての出会いがあった。振興会の皆さんとの交流、清掃活動等は、和気あいあいとしたおつき合いができた。玉寄課長をはじめ、個性あふれる皆さんのことが浮かんできてくる。また、研究室の朝のミーティング、読書後の意見交換、3分間スピーチ、食後の談話等があり、いろいろな思い出ができた。口べたで話をするのが苦手な私は、水曜日の意見交換会と金曜日の3分間スピーチ、その意見交換は緊張の日でした。しかし、所長、両主事、研究員の話しや考え方を聞くのは、緊張感の中にも楽しみであった。自分の考えのちっぽけさに気付かせてもらい、みなさんの考えの深さやすばらしい意見、主事の先生方のお話、まとめのお話をして下さる所長の奥のあるお話など、本当に研究所に来てよかったと思う。現場ではできない体験をさせていただいたことに誇りを持ち、前向きの姿勢で取り組みたい。

入所当初、研究生生活に馴染めず悩んだこともあったが、今はこの6カ月間、多方面から学ばせていただいたことに対し、有難く、感謝の気持ちでいっぱいである。

10月から現場に戻り、6カ月間の研究生生活を生かすことが、所長はじめ、野原主事、上原主事、上原弘子先生への何よりのご恩返しだと思い頑張ろうと思っている。私にとって忘れ得ぬ出会いであった。



自 分 色 の 花 を

南風原町立北丘小学校教諭 小波津 久美子

相田みつを氏の詩に

花を支える枝

枝を支える幹

根は見えねえんだなあ

というのがある。

四季折々の花を咲かせ、私達を楽しませてくれる花。そして枝幹。それらの花や枝・幹に水や養分を送り、植物を支えている根。直接目には見えぬが、植物の命を司る根。

研修を終え、「島尻教育研究所」が私にとっての「根」のような存在になった。

教師として、そろそろ自分色の花を咲かせる事ができるようになったこの頃。ふと気がつくと、「教える」という一方通行でのやり方が多く、児童の心を見過すことはなかっただろうか。それが、研究の場を持てた事により、今までの実践を見つめ、これまでの考えの転換を求められることになった。

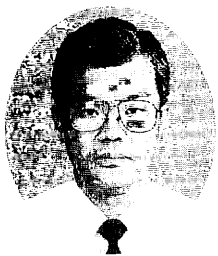
その第1は、「受容の存り方」である。研究をまとめるのに紆余曲折。その都度、所長や両主事6人の研究員仲間に励まされてきた。「なるほど」「確かにそうですね」と共感的に受け止めていただき、時間をかけていくうちに、自然と問題点に気づかされた。いつも混かい雰囲気にも包まれ、安定感を味わっていた。

また、指導講師の安次嶺敏雄先生には、研究に対する助言を賜ったばかりでなく、教育相談・学級経営のすばらしい実践者を紹介していただいた。現状にとどまることなく、常に挑戦し続ける先生方の姿勢に感動を覚えた。不思議なもので、そういう姿勢に触れるにつれ、私までも勇気が湧いてきて、充実した幸福感さえ覚えた。

第2点目は、「物の見方」である。南部振興会の皆様との出会いを通して、柔軟な見方・許容量の広さが、周囲の人の心をほぐす事になるという事を知った。また、研究のまとめでピリピリしている時等、プラスイメージを与えてもらったりした。「がんばれば出来る。」と思えてきたのも、プラス暗示の効用かもしれない。

以上、得る事が多かった今回の島尻教育研究所における半年の研修。今度は、本研究所で学んだ栄養分を児童に送る根になりたい。児童がそれぞれの花を咲かすことができるように支えていきたいと思う。児童の為に何が必要か、何が出来るかを考えながらー。

終りに、研究を進めるに当たり御指導頂いた宮城恒彦所長はじめ、野原廣子主事、上原幸得主事、担当の安次嶺敏雄先生、研究員の先生方に、感謝申し上げます。また、自分自身を見つめる機会に恵まれた事に対し関係の方々にも心からの感謝を申し上げます。



2 期生の誇りを忘れまい

具志頭村立具志頭中学校教諭 山 田 宏

島尻教育研究所で多くの方々と知り合えることができた。今後の人生にとっての財産である。いろんな方々に守られ、励まされ、そして支えられてきた。心から感謝したい。6カ月の研修を修了するにあたり、ここ島尻教育研究所に来て本当に良かったと実感している。

宮城恒彦所長より、折りに触れ数々の激励と手作りの品を頂いた。一つ一つが最大の励ましになった。感謝すると同時に身の引き締まる思いであった。

いつも笑顔で率直にアドバイスしてくれた野原廣子主事、どんな相談にも、親身になり一緒に考えてくれた上原幸得主事。身近にいてくれたことが研究員にとって大変心強く感じられた。

教育相談の第一人者であられる、真壁小学校の安次嶺教頭が指導講師についてくださったことも充実した研究を深める上で心から感謝している。何度となく研究所に訪ねてくださり多くの指導を賜り、また、貴重な資料を提供してもらった。真壁小学校や居酒屋での語らいがうれしかった。実践者訪問を企画して、県内で活躍されている西原東小学校教頭・玉城時子先生、喜納小学校教諭・神谷乗好先生から指導を受ける機会も作ってくださったことも有意義であった。

玉寄長市課長・大城進栄先生を中心とした、南部振興会の職員の皆様からもいろんな機会に励ましの声を掛けていただいた。課長の仕事に対する責任感、まわりへの気配りなどは、自分自身も大いに参考になった。今後現場に帰って実践できるようにしたい。

3分間スピーチ・『いま、家族に大切な60の話』を読んでの感想発表は、研究員同志の率直な意見交換ができて充実したひと時であった。家族、親子関係、恋愛、子育て、学生時代の思い出、沖縄文化などについてのそれぞれの思いを発表する場であった。今後もこのような本音での意見交換ができる職場、仲間を多く作っていききたい。

所外研修で、見聞を広めることができた。「ひめゆりの塔」、「アメリカンスクール」の見学など、なかでも那覇教育事務所所長、垣花武信先生の案内でまわった「歌碑めぐり」の感動は生涯忘れることはないであろう。

毎週一回のクラブ時間が、楽しみであった。「乙女椿」の仲宗根玲子先生に、「首里城」の踊りの手ほどきを受けた。その後、2度にわたる発表の機会に恵まれた。阪神大震災チャリティと照屋考代先生の結婚披露宴である。さらに、上原主事から教えていただいた三線を「天に響めさんしん3000」という戦後50周年記念事業で披露することもでき、感動した。

充実した6カ月であった。

こころよく研修に送り出してくださった具志頭中学校の吉元清助校長・赤嶺徳善教頭をはじめ職員の方々へ深く感謝したい。

今後は島尻教育研究所の2期生としての誇りを持ち、その研修成果を生かしつつ教育実践に努力していきたい。

教育講演（要旨）



新学力と学校週五日制

お茶の水女子大学教授

森 隆 夫

文部省が新しい学力観という言葉を使い出したんですが、それは学校週5日制を機に使い出したんですね。

どうしてこういう言葉が生まれてきたかという、今までの学校教育というのは学力を知識量で計っていた。それではだめだということです。これから社会に出て知識や技能の量だけでは勝負はできないのではないか、やはり社会へ出たら自分で考えて判断、行動していく、そういう能力が必要なんで、それは量で計れないということですね。

そこで「新学力観」このことから説明したいんですが、文部省の学校週5日制報告書にも「新しい学力観に基づく」と書いてあります。ここで考えないといけないのは「新」の意味と「観」の意味であります。まず「新」の意味であります。新しいという言葉をつくる時、どういう時に作るかといいますと、物事を活性化させる時につけます。物事がこのままではマンネリ化してだめだという時に「新」をつけるんです。学力に「新」というのはないから今の学力と昔の学力は全然違うと思うんです。ですから学力の中のどこを活性化すればいいのか、それが一番目のポイントだと思うんですね。

二番目は「観」の意味ですが、観というのは「人生観」「世界観」というように「観」というのは理念なんですね。

ですから、新しい学力観といっているところの中味を見てみますと、「観」というのは判断力とか思考力、表現力を意味し、その「理念」を実現するには「理論」がなければならない。

理論を実生活で実践していくには「方法論」「技術論」が必要である。つまり理論を実践にうつすには技術が必要なんです。「理念」「理論」「技術」と、この三点セットがそろわないと物事は進まないんです。ですから新しい学力観も思考力、想像力といくら唱えていても、これは単にスローガンですから、それを実現する理論、あるいは技術が必要である。それは何かということです。

具体的に学校でどうするかという方法論が必要なように、「新しい学力観」「思考力」「想像力」といったときに、想像力や思考力を育てるための理論や技術がなければ、学校では新しい学力はつきません。文部省が言っているのは新しい学力観ですから理念だけを指しているわけである。そこで問題は「新」の活性化についてですが、何を活性化するのか、それにはまず新しい学力の定義をしなければなりませんね。私の「新しい学力」の定義をいたします。

新しい学力とは、「知識」「知恵」「心」この3つのことばで定義づけられる。問題はその「知識」と「知恵」と「心」は、どこを活性化させるかという、この知識と知恵とのアンバランスが目立つ。これが問題ですね。情報化社会ということで、知識量だけは飛躍的に増大したんですね。しかし、知識をコン

コントロールする知恵が、これに見合っていない。知識量と知恵とのアンバランス。コンピューターの知識があるというのに、その知識を犯罪に利用する。それならコンピューターを使う知識がない方がまだ良いわけです。そういうおかしい事実が今どんどんおこっている。原子爆弾、環境破壊もそうかもしれません。知識と知恵のアンバランス。物知りは増えたけど、教養のある人が少なくなったと言った方がいいかも知れませんね。そうすると、知恵をつけるにはどうするか。新学力とは「知恵をつけること」を活性化するんですね。

ユダヤのことわざで、「知識は本の中に、知恵は生活の中に」というのがあります。知恵は、生活の中にあるんです。体験を通じて、すべて、ころんで、起きあがって、それで学んでいくんです。そういうふうに、ユダヤは昔から言っているんです。ですから知識だけある人のことを、ユダヤでは「本をたくさん背おったロバ」というんです。

その知恵をつける、考える力をつけるにはどうすればいいか。教師に新指導力が必要であり、子供が学習する方法を考えると同時に、教師の指導力も考えなければいけない、両方の面から考えるという事です。

私は、新学力と聞いたら、反射的にすぐ、新指導力とこう思うんです。皆さんが教える技術として、新指導力をつけなければならない。子供に知恵をつけるために、どういうことをやらなければいけないか、知恵をつけるには何からやるのか、私は知恵をつけるには、「物事に気づく直感力」が大事だと思うんです。気づかなければだめなんです。気付くという事が一番大事な事なんです。気付くには五感を使った方がいい。

ところが、我々の文明生活はほとんど視聴覚情報、間接経験情報なんですね。テレビの情報と同じなんです。学校教育でもそうですね。先生の声を手で聞いて教科書を目で読む、視聴覚だけの情報です。それでは、気付くには限界があるわけです。視聴覚で気づくよりも、五感をフルに使った方が気づく度合いが強いという事がわかるから子供を教室外へ放り出したほうがいいという事になる。学校へ6日行くんじゃなくて5日にすれば1日は自然に外に出て五感をフルに使っているいろんな事を体験した方がいろんな事に気づく。自分で気付いた時にはじめて自分で考えるんです。

自分で気付くようにしなくてはならない。それには自然が一番いい。我々は自然をおろそかにしすぎていると思う。自然、まず自然を体験しないで社会性だなんていっても、それは絵空事でまず自然性なんです。自然、自然性を身につけるとなぜいいかというと自然の神秘性というところを無意識のうちに学ばせる必要がある。自然は偉大なおもちゃである。自然をおもちゃとして、昔の子供たちは遊んできたのである。

ノーベル賞をもらった福井謙一先生は小さいころ小川へどじょうをつかまえにいった。疲れたので家へ帰って昼寝をしてたら、足がかゆいので目がさめた。見たら「ヒル」がとまっていた。で、ヒルを取ったら血が出た、かゆかった。これは五感を通じてかゆいというのはみんなわかるんです。これ、テレビ見る人はわかりませんよ、かゆいかどうか、やっぱり五感を使うというのが大事なんです。

小さい時に自分は自然の神秘性というものを何となく身につけた。それが将来の研究におおいに役立った。どういうふうに役立ったか、本能的に、この研究は物になる、物にならないかがわかるようになった。直感でわかるようになった。直感力というのは大事なんですよ。

最近の人に夢がなくなったといわれる。自然との接触が少なくなったから、あるいは、便利になりすぎたからじゃないですかね。不便な時に人間は考えるんです。逆境の方、不便な環境におかれると人間は努力する。学校は便利になりすぎたんです。便利というのはなぜいけないかというと、便利というのは依存という事ですね。依存という事はこれは自立の反対で、教育は人間の自立を目指しているのに、文明は便利、依存で依存心を全部無意識のうちに増大させている。学校があんまり便利になっちゃいけないんですよ、ますます子どもが自立できない。

つまり、「やや不便にする」ということが「教育の便利」という事にもなる。そういう逆説が成り立つわけですね。あんまり便利にしすぎた、親の過保護を解明するとそうなるわけです。つまり「依存」「便利」という事は他律という事なんです。教育は自立を目指すという、この依存と他律の関係、これをよく理解しておかないと教育がむずかしくなるという事です。今、物事すべて即物的になっている。もっと夢を与えるようにしなきゃいけない。その夢を現実の世界にもっていく。論理的にそれを整理してみると、クリエイティブの創造になるわけです。それを考えろ、考えるんだ、といったって、これはだめなんですよ。考える技術というか、考える手だてというか、考えるステップを「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」となるならば、「ホップ」は気付かせる、「ステップ」は夢をひろげる、何でもいから空想してみる、とてつもない事を考えてみる。ジャンプは論理的、科学的に整理してできる物、できないもの、あればやろうとする、研究する、考えさせる。これが私は、知恵を付けるホップ・ステップ・ジャンプじゃなかろうかなと思うんです。

ともかく、ホップ・ステップ・ジャンプ、「気づく」「夢をひろげる」「考える」そういったかたちで知恵をつけたらどうかな、ということです。

次に、もう一つのアンバランス、それは心のアンバランスなんです。今、心をめぐっていくつかの問題点がありますが、私は三つぐらいのアンバランスがあると思うんです。一つは「物と心のアンバランス」GNP世界第一位となり日本は豊かになったという。しかし心はちっとも豊かになっていない。

次に二番目のアンバランスは、肉体的な成熟と精神的、人格的、未成熟とのアンバランス、肉体は成熟して老化しますが、人間の心や人格が成熟したという話は聞いた事ないですね。私はきっと、高齢化社会っていうのは肉体的な成熟と、人格的な未成熟とのギャップが増々ひらく社会と、こういう事になるわけです。そうすると、おのずから何をすべきかがわかるわけです。生涯学習は何を成すべきかという事です。

三番目は、「ハイテク」と「ハイタッチ」のアンバランス。ハイテクというのは、最先端技術、ハイテクノロジーを意味し、ハイタッチ、というのは心と心とのふれあいを意味する。私は、あたたかい心のふれ合いと訳しております。ハイテクは冷たい技術、その中にあって、心の教育はどうしてやるかということです。心の教育のキーワードは「感動」と「感化」しかないんです。感動は幼い頃がいい。幼い頃、身近な人の直接体験しかないんです。親とか先生から直接自分が体験するんですよ。直接体験を身近な人から受ける。小さい時じゃないとだめなんです。大きくなってからではだめなんです。

感動というのはだいたい涙がでます。感動は一時的です。涙がキーワード。だから小さい時に、そういう感動の涙を流さないから、心が育たないんです。ここでまた、ユダヤの諺を紹介しましょう。「石けん

は体のために、涙は心のためにある。石けんが体の垢をおとすように、涙は心の垢をおとす」とユダヤではいっているわけです。そういうわけで、小さい時の子どもの感動の涙、直接体験の感動ですよ、それが今ないんですよ。ですから、テレビばかり見て育っていますから、いじめなんて変な事が起るんですよ。感動の涙を流していれば、ああいう事も起こらないんじゃないかと思うんです。

感動というのは、一時的だっていいましたね、感動だけでは心の教育はできないんです。もう一つ、感化。感化っていうのは日常的、日常的というのは無意識的という事です。日常的に影響を受ける、感化される、昔はこれを「薫陶」といいましたね。

というわけで、心の教育は感動と感化、これしかないですね。りっぱな人は立っているだけでも教育できる。感動と感化、それを活性化するのが新学力の新しい意味なんです。

次に、学校週五日制になって、この新学力がどういうふうに変ってくるのかと、学校の方は変わるから、先生の方も変わるから一生懸命やると思うんですが、家庭や地域が変わらないとだめだっていう事です。家庭や地域の方も変わらないとうまくいかないということです。この新学力は、じゃあ家庭はどう変わるのか、先程も言ったように家庭で一番大事なことは模倣ですから、模倣ときいたら、模範と連想しなきゃいけない。しかし、今からだと手遅れですから、手遅れであつたらそれなりに何かできないかと考えるわけです。

二番目に大事なことは、家庭っていうのは、心の庭を作る所なんです。家プラス庭という字を書きますね。家庭、あの庭は花の咲く庭じゃないんです。心の庭なんです。心の庭というのは、だんらんの間、ストレス解消の間、悩みを解消する間、そういう所が、今ないんですよ。ストレス解消には「会話と笑い」子供はどこでストレス解消するんですか、家庭に心の庭、ストレス解消の間を作ってやる。家庭に心の庭がない子どもには学校が心の居場所を代わってあげなきゃいけない、「会話と笑い」、一人で会話できませんからね、一緒になきゃだめなんですよ。「一緒に」がキーワード。「一緒にフロに入り」「一緒に話し合っで」「一緒に寝る」。「withの精神」と呼んでますけどね。

今は「一緒に」、がないでしょ。みんなバラバラ。だから家庭では模範を示せないんですから、せめて家庭で心の庭を作ってストレス解消の間を作ってあげる。悩みを引き出す、その上に、学校が能力を引き出す。これが教育しやすいんですよ。

では地域はどうだろう。

地域の教育力ってなんですか。地域に図書館だとか博物館だとか、そういう施設がいくつあるとか、そんな事じゃないですよ、地域の教育力というのは。無意識的な教育力だと私は思うんです。つまり背中の教育、地域社会を構成する大人が背中で教育できるかどうかということ。模範を示すということです。日常的にそういう背中の教育をするのが地域の教育力なんですよ。というふうに考えてくると、地域のあり方というのがわかってくるんです。そういう事ができるようになってからはじめて、学校、家庭、社会の連携教育ができるんじゃないかと、私は思います。

最後になりましたが、教師の新指導力というのをつけるにはどうすればいいのか。新指導力、今迄皆さんは、算数教育とか、理科教育とか、英語教育とか教科の教育方法の技術を研究なさってきたと思うんです。先程も言ったように教育の目的は人格の完成にあるわけですから、人格を完成する為に、いろいろな

教科を教えているんだという観点に立ちますと、人間担任機能をもっと高める必要があるんじゃないかと、「教科担任機能」だけでなく「人間担任機能」を高めるという事が必要なんです。「人間担任機能」が高くないと、いくら教育技術がすぐれていても、効果が上がらないんじゃないかと思うわけです。つまり専門性と人間性という事なんです。

それが私の「是非とも教師論」なんですけれども、立派な先生というのは頭が良いとか、教え方が上手より前に、人間的に立派だっていう事が大事ですね。だから「専門性」と「人間性」という事を比較すれば、どちらを優先させるかという、人間性の方でしょうね。人間性を優先する、なぜか、教育は対人サービス業ですからね。人間が人間に対するサービス業ですから、人間性が問われるんです。全身、全人格をもって接するという対人サービス業、それを「教育の愛」と呼ぶわけですね。教育の愛の典型は親の愛なんです、親の愛に匹敵する教師はまずいないですね。そういう人は素質のある教師。資質と素質は違いますよ。親の愛と同じような愛を持っている教師が素質のある先生、資質の向上というのは素質に近づく無限の努力をするということが資質の向上ですから。

立派な人とはどういう人か。いい医者、いい教師、いい国会議員。いい人はどこでも不足しているんですよ。いい人とはなんだろうと考えてみると、やっぱり専門性と人間性とのバランス。人間性というのはやっぱり、好かれて尊敬される人だという事に気づいた。だから、好かれて尊敬されれば「鬼に金棒」。

じゃ、尊敬されるにはどうすればいいか。まず軽蔑されないようにする。それには全力投球、汗を流す、手ぬきをしない、これしかないです。一生懸命やっていれば、少なくとも軽蔑はしないです。目標をもって努力する、信念、めあて、自分のめあて、子供にめあてを作ってあげたら自分もめあてをもっていきなかなきゃならない。

個性というのは人生の何か得意技をもつという事。私の個性の定義は「人生の得意技」、自信をもって第三者にいえるものをもつ、何か一つ、自信を持っていなきゃ生きていけないじゃないでしょうか、みなさん。それが生きる証し、「アイデンティティ」ではないかと思うんですよ。それにはまず自分自身を知って、自分の長所にアクセル、短所にブレーキをかけるというのか、これが人生の名ドライバーの運転。

さっそくですね、明日と言わず今日から、そういう先生になる努力をする。それが新指導力であり、新学力をつける第一歩ではなかろうかと、私は思うんであります。



島尻における統合保育
(幼稚園担当者を対象にしたアンケートによる集計の結果)

糸満市立糸満南幼稚園教諭 佐久間 美佐子

1 アンケート提出者 (122名)

2 統合保育経験者の割合

	0年～5年	5年～10年	11年～15年	16年～20年	21年以上	計
アンケート提出者	31名	6名	6名	45名	33名	122名
統合保育の経験者	13名	4名	6名	37名	29名	89名
割合	42%	67%	100%	82%	88%	73%

3 現在(平成7年度)統合保育実施園

市町村名 (園数)	糸満市 (9)	豊見城村 (6)	知念村 (2)	南風原町 (4)	玉城村 (3)	東風平町 (2)	具志頭村 (2)	与那原町 (2)	大里村 (2)	佐敷町 (1)	離島(渡嘉敷・座間味・ 粟国・慶留間)(4)	計 37園
統合保育実園	3園	3園	0園	2園	0園	0園	0園	0園	0園	0園	1園	9園
割合	33%	50%	0%	50%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	25%	24%

4 統合保育の現在の環境と意見、要望など(統合保育実施教諭 15名)

(1) 施設設備面で

満 足	不満足	備 考
33%	40%	・予算がとても少ない。 ・障害児の為の教材等も少なく、教材作成費等ほとんど担任個人負担になる ・障害に応じた保育施設や用具がほしい。

(2) 人的環境面で

満 足 (5名) 33%	・障害児にどうしても手がかかるので学級定員数の減や男子教諭・養護教諭・用務員等を配置してほしい。 ・責任問題などの対策に不安がある。
不満足 (9名) 60%	・他の子よりも指導を要するので教師の加配をしてほしい。 ・専門知識のある人を配慮してほしい。 ・専門家の相談・指導等が受けられるよう配慮してほしい。 ・専門の先生方と一緒に研修をしたい(統合保育の研修がない。)

5 統合保育で大切だと思われる事項(3つ選択)

順位	事 項	人 数	割 合
1位	加配教師の配置	76名	62%
2位	家庭との連携と協力	57名	47%
3位	専門家の巡回相談、指導(医師・保健婦・教師・ワーカー等)	56名	46%
4位	担任教師の指導力(障害に対する専門的知識や援助のあり方等)	52名	43%
5位	園全体として統合保育に取り組む協力体制	46名	38%
6位	関係機関との連携(保健所・児童相談所・障害児施設・養護学校等)	25名	20%
7位	障害児が安心して生活できる施設設備の充実	24名	20%
8位	カリキュラム(障害児にそった柔軟な指導計画)	14名	11%
9位	幼・保、幼・小との連携	4名	3%

6 統合保育について（記入人数111名）

	人 数	割 合
(1) 統合保育はできるだけしたくない	15 名	14 %
(2) すすんで受け入れたい	42 名	38 %
(3) どちらでもよい	54 名	49 %

7 できるだけしたくないと答えた理由（上記(1)の理由）

担任の負担面から	・障害児のみならず加配への気遣い等で負担が大きい。 ・専門的知識がない為、適切な援助や指導が出来ないのでと、不安になる。 ・現在の学級人数及び専門的知識のある職員数等で無理がある。 ・障害によってはその障害児だけに手がかりすぎる。 ・一人一人を知ることが健常児だけでも十分であるとはいえないから。 ・保育の研修（充実・見直し）に時間を使いたい。 ・責任がもてない。
健常児の発達面から	・障害児に手をかける事により、他の子に目を向ける事がおろそかになる。 ・一斉保育を取り入れにくくなる。 ・障害児優先になってしまうのではと、不安である。
障害児の発達面から	・専門的な知識・技術を持っている機関での保育がより伸びると思うから ・本人の障害に合った指導が本当に出来るのか不安である。

すすんで受けたいと答えた理由

健常児の発達面から	・思いやりやいたわりの心、やさしい心、助けあいの心が育つ。 ・障害児への関わり方が自然に身につくから。 ・自分たちの世界に障害を持っている子がいることを認識できる。 ・差別をしない子になる。 ・障害を持った人、強い人、弱い人が共に暮らしていける社会は当たり前だという生活環境をつくりたい。 ・健常児・障害児が共に支えあっていくことを学び取る機会になる。 ・相手の立場に立って考え、行動が出来る子に育つ。 ・健康のありがたさがわかる。
障害児の発達面から	・同年齢の友達と一緒に生活することの楽しさを味わう。 ・健常児との関わりの中で社会で生きていく力を身につけてほしい。 ・自分も皆と同じようにできるという気持ちが出てくる。（意欲をもつ） ・発達が促される。発達のステップで健常児を目標にする。 ・他児こそよい教師であり、健常児をモデルにして学習していくから。 ・生活経験や友達関係が広がる。 ・障害児本人にも人間は皆同じであることを感じてもらいたい。 ・直接体験の中で子供同志の相互作用から育つものが大きい。 ・ハンディのある現実を受けとめ、厳しい中で健常児と共に育ち合える。
そ の 他	・障害児保育が保育の原点だと思うから、私も共に学びたい気持ちを持つ。 ・教師自身障害児から学びとることが大きい。 ・幼稚園教育の基本的な事柄の職員のチームワークができる。 ・一人一人の個性をとらえる確かな目が職員に育つから。 ・障害児がいて当たり前の社会だから。 ・小さい頃から自分と違う人の存在を受け入れられる教育をしたい。 ・健常児も障害児も共に育つためには専門知識を持った加配教諭の配置、施設設備の充実等の裏付けが最も大事だと思う。

8 統合保育をすすめるにあたって考えられるプラス面

	順位	項 目	人 数	割 合
障害児側	1位	豊富な刺激を受けたり行動を模倣することによって発達が促される。	69名	56%
	2位	生活経験の広がりと共に、健常児から学びとるところが多い。	37名	30%
	3位	生活習慣の自立が促される。	9名	7%
	4位	よく遊べるようになり、友達関係が広がる。	5名	4%
	5位	遊びや生活の流れにそって規則正しい行動がとれるようになる。	4名	3%
健常児	1位	いたわりの心、思いやりの心、助けあいの心が育つ。	94名	79%
	2位	自分と違った友達の存在を知る。	24名	20%
	3位	集団としてのまとまりができる。	1名	1%
保育者側	1位	助け合う子供の集団、教師の集団が育つ。	31名	27%
	2位	困難を乗り越えながら成長する子供の力に感動し、やりがいを感じる。	30名	26%
	3位	幼児の発達のすじみちについて、改めて勉強できる。	27名	23%
	4位	いろいろな障害について勉強することができる。	17名	15%
	5位	きめ細かな観察眼が育ち、指導技術が向上する。	10名	9%

9 統合保育をすすめるにあたって考えられるマイナス面

	順位	内 容	人 数	割 合
障害児側	1位	適切な指導がなされないため、とり残されることが多い。	57名	57%
	2位	成長するにつれて遅れが目立ち、行動が消極的になる。	21名	21%
	3位	疲労することが多い。	12名	12%
	4位	強制や叱られたりすることが多く、かんしゃく、甘え、依頼心が強くなる。	10名	10%
健常児側	1位	保育の流れが防げられ、集中できにくい。	48名	50%
	2位	保育者が手をとられるため、けんかや不満が出たり不安定になる。	26名	27%
	3位	障害幼児の世話をやしすぎる。	14名	15%
	4位	障害児をからかったり、真似をして危険な行動をとる。	6名	6%
	5位	弱いもののいじめをする。	2名	2%
保育者側	1位	専門的な知識がないので、常に不安がある。	73名	67%
	2位	障害児に労力をとられ、健常児の指導が十分にできない。	20名	18%
	3位	健常児よりも余分に注意と労力があるので疲労が激しい。	14名	13%
	4位	記録や関係者との連絡に時間がとられ、健常児の指導が十分にできない。	2名	2%

10 統合保育の今後の受け入れについての意見や考え（複数選択）

順位	内 容	人 数	割 合
1位	・障害児は、はじめに専門的な療育を受け、その後可能であれば健常児と統合するのが望ましい。	91名	55%
2位	・障害児は、障害について専門的知識をもつ人がその専門施設がある所で指導することが望ましい。	36名	22%
3位	・すべての障害は、最初から健常児と共に保育されるべきである。	34名	20%
4位	・統合保育をすすめるにあたって、専門的知識や施設等、特別な配慮はいらないと思う。	5名	3%